

Bilge, Sirma, 2013, "Intersectionality Undone: Saving Intersectionality from Feminist Intersectionality Studies," *Du Bois Review*, 10(2): 405-425.

シルマ・ビルゲ, 2013, 「未完のプロジェクトとしてのインターセクショナリティ——フェミニスト・インターセクショナリティ研究からインターセクショナリティを救い出す」

※ () の数字はページ数を表す。

レジュメ作成者による紹介文

著者の Sirma Bilge はモントリール大学社会学部教授で、インターセクショナリティ理論の専門家であり、これまでに多数のインターセクショナリティに関する論考を執筆している。本稿は、インターセクショナリティがフェミニスト学界でかつてないほど国際的な評価を得ている今、学問的フェミニズム disciplinary feminism が、それを再構成し弱体化させる実践に携わっていることを指摘している。2023年4月現在の本稿の引用数は882であり、インターセクショナリティに関する代表的な論考として位置付けられている。

■導入 (405-407)

- 本稿は、現代のフェミニズムの学術的議論における、「インターセクショナリティを脱政治化し、インターセクショナリティが有する社会正義志向の変革のための可能性を無力化する」という一連の実践を明らかにする¹。
 - 具体的な実践としては、インターセクショナリティを「メタ理論的な熟考」という学問的実践に限定することや、インターセクショナリティは「フェミニズムの発案」であり、「インターセクショナリティのより広い系譜」を再構成する必要があるという主張を通じて、インターセクショナリティを「ホワイトニング」することなどが挙げられる。
 - 現在の政治状況において、インターセクショナリティの実践の必要性は、かつてないほど差し迫っているといえるだろう。なぜなら、インターセクショナリティは、新自由主義的な体制のもとで、協力するよりもむしろ競争することが要請されて

¹ ブラック・フェミニズムに起源をもつインターセクショナリティ・アプローチは、複数の社会的カテゴリーの交差 intersection によって生じる権力関係が、個々人の社会的立場や日常的経験にどのような影響を及ぼすのかを検討する。とりわけ人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、国籍、障害の有無、エスニシティ、年齢などの数々のカテゴリーを、相互に関係し形成しあうものとしてとらえる点に特徴がある (Collins and Bilge 2020=2021: 16)。その学術的起源としては、Kimberly Crenshaw (1989) の論文「Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine」が挙げられる。Crenshaw は、ジェンダーと人種が別々のカテゴリーとして扱われる結果、黒人女性がフェミニストと反人種主義者の両方の理論と政治において周縁化されてしまうという傾向に注意を促し、ジェンダーと人種の両方を考慮に入れ、それらの相互作用がいかにして黒人女性の経験を形成するのかに着目する必要があると主張した。

いる様々な社会正義志向の運動の間で、非抑圧的な政治的連合を構築するための重要な可能性を提供するからである。

■新自由主義的な多様性文化が飽和した時代におけるインターセクショナリティの再考察 (407-410)

- 新自由主義は、社会生活を集団の相互作用としてではなく、個々の起業家の相互作用としてとらえ、構造的な不平等をもたらす前提条件を否定している。その結果、ラディカルな社会正義のアジェンダを促進するための分析的レンズ・政治的ツールとしてのインターセクショナリティの概念は、希釈され、バラバラになってしまう。
- 脱政治化されたインターセクショナリティは、あらゆる考え方を市場価値として捉え直す新自由主義にとって特に有用である。
 - 例えば、新自由主義において支配的な集団がさまざまなイデオロギー的・制度的目標を達成することを企図する中で、アイデンティティ・ポリティクスは²、「多様性」の実現のため道具として利用されてしまう (Ward 2007)。
 - 「多様性」は新自由主義的な経営の特徴となり、「良い政治と効率的な事業運営のための経営的教訓」を提供する。そこでは様々なマイノリティによる闘いが、市場主導で国家が承認した「多様性」のガバナンスに組み込まれる (Duggan 2003)³。また、「多様性」に関する知識は、市場価値のある専門知識として提示され、健全な判断力とプロフェッショナリズムを示すものとして捉えられる (Ward 2007)。

² アイデンティティ・ポリティクスとは、何らかの差異を共有するとみなされる集団を単位としてさまざまな社会的資源の獲得を目指そうとする運動である。アイデンティティ・ポリティクスには、マイノリティ当事者に固有の要求を争点化しやすいといった利点がある反面、マイノリティ集団の「差違」を本質化するような圧力を個々のマイノリティ成員に与える危険性があることや、集団内部における差異が結果として不可視化されることなど、いくつかの弊害があることも知られている (金 2017: 135)。

³ Duggan は 2003 年の著作で、90 年代中盤以降、特に 2001 年の 9.11 以降、合衆国のゲイ団体が新自由主義的なレトリックを採用するようになり、結婚 (同性婚) や軍隊に組み込まれることへの要求が強まったことを指摘する。その代表的な団体が Independent Gay Forum (IGF) で、IGF は「ゲイやレズビアン市民社会への完全な包摂」を求め、その代わりとして、ゲイやレズビアンが国民生活の「創造性、たくましさ、品性」に貢献することを宣言した。Duggan は IGF のような団体のネオリベラルな性の政治を「新しいホモノーマティヴィティ the new homonormativity」と呼び、それはヘテロノーマティヴな前提や制度に対立するものではなく、むしろそれらを支え、補強し、「家庭と消費につなぎとめられた、私的化され脱政治化されたゲイ・カルチャー a privatized, depoliticized gay culture anchored in domesticity and consumption」の可能性を重視するものとして批判している (黒岩 2016: 61-62)。

- この論文における課題のひとつは、非政治化されたインターセクショナルリティがアカデミック・フェミニズム academic feminism によってどのように達成され、「管理」されているのかということに関して、答えを提示することである。
 - ・ 本稿では以下で、インターセクショナルリティが意図的に無力化されるいくつかの論法パターンや傾向について述べる。ここで論じられる問題含みの戦略は、すべてのアカデミック・フェミニズムの議論を特徴づけるものではなく、私が学問的フェミニズム disciplinary feminism と呼ぶ一種の学問において展開されるものである。
 - ・ 学問的フェミニズムとは、知識生産に関する覇権的な立場、すなわち、正当な科学的知識を構成する条件に挑戦することよりも、その条件に適合することを重視する「科学」のあり方を指している。これは、アカデミック・フェミニズムが当初抱いていた政治的衝動とは異なる。アカデミック・フェミニズムは、「伝統的な学問分野の標準化に対するフェミニストの抵抗を制度化する手段」(Wiegman 2012: 71)として自らを構想し、現在でも多くのフェミニストが、学術や公的生活における覇権の実践に挑戦するために、伝統的な学問分野に対して批判を行っている。対照的に、学問的フェミニズムは、インターセクショナルリティの脱政治化に加担している。

■ インターセクショナルリティとアカデミック (学問的) フェミニズム (410-411)

- この 20 年間、インターセクショナルリティは世界中のフェミニスト学者たちによって特別な賞賛と評価を受けてきた。
 - ・ それは、学界における「最高のフェミニズムの実践」(Weber and Parra-Medina, 2003: 223-224)、「これまでの女性学・ジェンダー研究における最も重要な理論的貢献」(McCall 2005: 1771)、「フェミニズムの政治的推進力」の触媒 (Knapp 2005: 254)、「社会正義の問題を理解するための世界的に利用されている枠組み」(Yuval-Davis 2011: xi)、「第三波フェミニズムにおける 4 つの主要な視点のひとつ」(Mann and Huffman 2005: 57)、「フェミニスト思考の中心概念」(Shields 2008: 301) であるといわれている。
- インターセクショナルリティは、理論的・実証的な知識生産や政策提言を通じて、自分たちの生活を形作る権力のシステムに立ち向かい、それに対抗するために、複数の抑圧に直面する主体が練りあげた分析・政治ツールである。
 - ・ 学問的フェミニズムがインターセクショナルリティを「引き受ける」あるいは「引き継ぐ」ことは、インターセクショナルリティを、複数の絡み合った抑圧に直面する社会的アクターの政治的主観や闘争に基礎を置くその最初のビジョンに再び立ち戻ろうとする人々を疎外することにつながる。もし学問的フェミニズムが、より力の弱い社会的アクターを犠牲にして、インターセクショナルリティの議論をコントロ

ールすることを論ずるならば、インターセクショナリティは脱政治化される。

■メタ理論的考察を通してインターセクショナリティを脱政治化する (411-412)

- インターセクショナリティに関するヨーロッパ大陸のフェミニスト研究においては、経験的な根拠を重視せずにインターセクショナリティを議論するというある種の傾向がある。
 - 特に北米の文脈におけるインターセクショナリティの議論に詳しい人は、「インターセクショナリティはどうあるべきか、あるいはどうあるべきでないか」で始まる文章や、推測的かつ規範的な宣言が大量にあることに気づく。これらの考察は、インターセクショナリティが研究において実際に何をするのか、研究者はインターセクショナリティを使って何をするのか、そしてどのような結果をもたらすのかを考慮しないままである。このような傾向は、インターセクショナリティを過度に学術的な思索の場に閉じ込めてしまう危険性をはらんでいる。
 - 本稿は、メタ理論的な考察が広まることは、社会正義のためのツールとしてのインターセクショナリティの可能性から目をそらし、それを台無しにすることになると主張する。

■インターセクショナリティのホワイトニング (412-413)

- インターセクショナリティが台無しにされるもうひとつの方法は、私がインターセクショナリティのホワイトニングと呼ぶ議論のパターンや傾向である。これらのパターンはすべて、インターセクショナリティを学問的フェミニズムに併合し、インターセクショナリティの思想と実践における人種の構成的役割を排除することに関与している。
 - インターセクショナリティのホワイトニングは、複数のマイノリティのアイデンティティを持ち、社会的アクターとして疎外されている人々——有色人種の女性や有色人種のクィア——の貢献を議論から排除したり見過ごしたりすることによって達成される部分もある。この問題は、特にヨーロッパで深刻である。
 - インターセクショナリティのホワイトニングはいくつかの論点を通して生み出されているが、ここでは「インターセクショナリティはフェミニズムの発案である」と「インターセクショナリティの系譜を広げる必要がある」というふたつの論点に焦点を当てる。

(1)戦略1:「インターセクショナリティはフェミニズムの発案である」(413-415)

- インターセクショナリティのホワイトニングのための最も重要な論証戦略のひとつは、インターセクショナリティを「フェミニズムの発案」であると頻りに唱えることである。
 - このようなりフレーミングは、インターセクショナリティをフェミニズムとジ

ェンダー研究の特質とし、「インターセクショナリティの相互横断的起源」を消し去るものである。この流用によって、インターセクショナリティの思想と活動における人種を中心性が軽視され、同時に、インターセクショナリティの形成におけるフェミニズムと有色人種の女性の間の歴史的・現代的緊張が不明瞭となる。

- ・ ヨーロッパの学問的フェミニズムは、インターセクショナリティという概念の所有権を主張するだけでなく、例えば、ヨーロッパにとって人種は無関係なカテゴリーであると宣言し、インターセクショナリティにおける人種の重要性を最小化することによって、インターセクショナリティを「ホワイトニング」する。そして、人種を分析的なカテゴリーとして認めず、代わりに民族、文化、宗教といったカテゴリーによって問題を構成しようとする。

(2)戦略 2:「インターセクショナリティの系譜を広げなければならない」(416-419)

- ・ インターセクショナリティの系譜を広げようという呼びかけは、2009年のフランクフルトの会議「Celebrating Intersectionality?」で主なテーマとなった。2012年にローザンヌで開催されたフランス語圏の大規模なフェミニスト会議でも、同様の呼びかけが展開された。この会議では、インターセクショナリティの系譜を広げるとともに、フランスのフェミニスト思想が、(インターセクショナリティと)「同様の問題」に異なる理論・概念手段で取り組んできたと主張され、それに対する「正当な評価」が求められた。
- ・ この呼びかけに関して、特に次のふたつの点が重要である。第一に、彼女たちはインターセクショナリティと「同様の問題」に取り組んでいたのではなく、むしろ階級とジェンダーの結びつきに焦点を当てていた思想史を、インターセクショナリティを用いて再ブランド化したという点である。第二に、この呼びかけは白人の学問的フェミニストによって行われ、事実上、自分たちはずっと「インターセクショナリティ論者」であったと主張している。つまり、すでに人種的特権の恩恵を受けている学者が、その人種的特権を認めず、責任を取らず、事実上、それを永続させているのである。
- ・ インターセクショナリティの系譜を広げようとするこうした努力は、有色人種の女性をインターセクショナリティの先駆者あるいは「暗黙の」思想家として特定することにつながることはほとんどなく、代わりに Alexandra Kollontai、Zillah Eisenstein、そして社会主義フェミニストといった白人研究者たちが、インターセクショナリティを生み出す基盤として再配置された。この動きは、資本主義や家父長制に関する有色人種フェミニストたちによる貴重な仕事を縮小・改編している。

■結論 (419-421)

- インターセクショナリティを用いる際には、歴史的偶発性、特定の文脈、議論の目的に適切な注意を払う必要がある。インターセクショナリティがどのように展開され、また展開されるべきかについて交差的に考えるには、構造的な位置と権力の差を考慮する必要がある。
- 結論として、学問的フェミニズムによるインターセクショナリティの併合は、インターセクショナリティに関する現代の議論や知識生産において人種差別を受けた学者や活動家が体系的に疎外されている状況と無関連ではないことを強調しておきたい。インターセクショナリティを「フェミニズム」の創造物、すなわちフェミニズム内部の議論の成果として捉え直すことは、インターセクショナリティが生まれた画期的な対立軸、すなわちフェミニズム内部の人種差別と対峙する有色人種のフェミニストを効果的に消し去っている。

【参考文献】

- Collins, Patricia Hill, and Sirma Bilge, 2016, *Intersectionality (Key Concepts)*, Cambridge: Polity Press. (下地ローレンス吉孝監訳／小原理乃訳, 2021, 『インターセクショナリティ』人文書院.)
- Crenshaw, Kimberley, 1989, "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics," *University of Chicago Legal Forum*, 140: 139-167.
- 金明秀, 2017, 「書評 李洪章著『在日朝鮮人という民族経験——個人に立脚した共同性の再考へ』」『フォーラム現代社会学』16 (0) : 135-137.
- 黒岩裕市, 2016, 「脱政治化という〈性の政治〉——村上春樹『偶然の旅人』を読む」『立命館大学言語文化研究』28 (2) : 61-69.